そめちがへ

森鷗外

時節は五月雨(さみだれ)のまだ思切(おもいきり)悪く昨夕(ゆうべ)より小止(おやみ)なく降りて、欞子(れんじ)の下(もと)に四足踏伸ばしたる猫懶(ねこものう)くして起(た)たんともせず、夜更(よふけ)て酔はされし酒に、明(あけ)近くからぐつすり眠り、朝飯(あさめし)と午餉(ひるめし)とを一つに片付けたる兼吉(かねきち)が、浴衣(ゆかた)脱捨てて引つ掛くる衣は紺(こん)にあめ入の明石(あかし)、唐繻子(とうじゅす)の丸帯うるささうに締(し)め畢(おわ)り、何処(どこ)かけんのある顔の眉蹙(まゆしか)めて、四分珠(しぶだま)の金釵(きんかん)もて結髪(むすびがみ)の頭をやけに搔き、それもこれも私がいつもののんきで、気が付かずにゐたからの事、人を恨むには当りませぬと、長火鉢(ながひばち)の前に煙草(タバコ)喫(の)みゐるお上(かみ)に暇乞(いとまごい)して帰らんとする、代地に名うての待合朝倉(まちあいあさくら)の戸口を開けて、つと

入り来るは四十近いでつぷり太つた男、白の縞上布(しまじょうふ)の帷子(かたびら)の襟(えり)寛(くつろ)げて、寄道(よりみち)したお蔭にこの悪い道を歩かせられしため暑さも一入(ひとしお)なり、悪いといへば兼吉つあんの顔色の悪さ、一通りの事ではなささうなり、今から帰るでもあるまじ、不肖(ふしょう)して己(おれ)に附き合ひ喫み直してはと遠慮なき勧(すすめ)に、お上(かみ)が指図して案内(あない)さするは二階の六畳、三谷(さんや)さんなればと返事待つまでもなくお万(まん)に口を掛け、暫(しばら)くは差向(さしむかい)にて、聞けば塞(ふさ)ぐも無理ならず、昨夕は御存じの親方呼びに遣(や)りしに、詰らぬ行掛りの末縺(もつ)れて、何(なに)、人(ひと)を、そんなつひ通(とおり)の分疏(いいわけ)を聞くあたいだとお思ひか、帰るならお帰りと心強くい

なせしに、一座では口もろくに利かぬあの喰せものの
お徳め、途で待ち受けて連れ往きしを今朝聞いた悔や
しさ、親方の意気地なしは今始まつたではなけれど、
私の気にもなつて見て下され、未練ではござりませぬ、
唯だ業が沸えてなりませぬ、親方の帰つた迹ではいつ
もの柳連の二人が来てゐたこととて、附景気で面白
さうに騒がれるだけ騒ぎ、毒と知りながら、麦酒に酒
雑ぜてのぐい喫、いまだに頭痛がしてなりませぬとの
事なり、兼吉がこの話の内、半熟の卵に焼塩添へて女
の持ち運びし杯盤は、幾らか気色を直し肝癪を和ぐ
る媒となり、失せた血色の目の縁に上る頃、お万が

客は口軽く、未練がないとはさすがは兼吉つぁんだ、好く言つた、相手が相手ゆゑお前に実（じつ）がないとこの三谷が誰にも言はせぬ、さういふ時の第一の薬は何でもしたい事をして遊ぶに限る、あれならといふ人はないか、おれには差当り心当はなけれど、中屋（なかや）の松（まつ）つぁんなどはどうだらうといへば、兼吉は寂（さび）しくほほと笑ひ、あんまり未練がなさ過ぎるか知れませねど、腹にあるだけ言つてしまひたいのは私の癖（くせ）、中屋とまでいはれては黙つてはゐられませぬ、松つぁんならぬ弟の清（せい）さん、浮気らしいがあの人なら一日でも遊んで見たいと兼て思つてをりました、なるほどさうありさうな事で

はあれど、弟の方にはしかもお前の友達の小花といふ色があるではないか、頼まれもせぬにおれから言ひ出し、今更ら理窟をいふではなけれど、噂に聞けば小花と清二とは、商売用で荻江の内へ往き始めし比、いつとなく出来た仲だとやら、その上松つあんよりは捌けてゐるやうでも、あの生真面目さ加減では覚束ない、どうやら常談らしくもないお前の返詞がおれの腹に落ち兼ねる、お前は本当に清さんを呼ばせる気か、はい本当に呼んでおもらひ申す気でございます、小花さんに済まぬとは私にも熟く分つてをれど、清さんならと思ふも疾うからなれば、さうなる日には小花さんに

はかうと思ひ定めてゐるも疾うから、お徳さんなぞのやうにけちなことは私はせぬ、私の心を打ち開けた上で、清さんは何とおいひか知らねど、嫌とならそれまでの事、万に一つも聞いてもらはれたら、それから先は清さんの心次第、お前の親切に絆(ほだ)されて一旦かうはなつたれど、それでは小花に義理が立たぬ、これきり思ひ切れとなら、思ひ切つて小花さんに立派に謝(あやま)る分(ぶん)のこと、清さんに限つて小花さんを私(わたし)に見変へるといふはずはなけれど、さうなれば私は命も何も入(い)りませぬ、それぢや命掛といふのだね、凄(すご)い話になつて来た、己なんぞの目ぢやあ、色の浅黒い瘦(やせ)つぽちの小

花より女は遥（はるか）兼ちやんが上だ、清こうは慥（たし）か二十五でお前には一つ二つの弟、可哀（かあい）がられて夢中になつた日には小花には気の毒なれど、呼ぶだけは己が呼ぶ、跡は兼吉つあんの腕次第だと、座を外してゐた女を呼んで使の事を頼めば、銚子（ちょうし）持つて立出づる廊下の摩（す）れ違（ちが）ひさま、兼吉ねえさんが、ああ下で聞いてよと入り来るはお万なり、髪は文金帷子（ぶんきんかたびら）は御納戸地（おなんどぢ）に大名縞（だいみょうじま）といふ拵（こしらえ）、好（よ）く稼（かせ）ぐとは偽（うそ）か真（まこと）か、肉置（ししおき）善き体ながらどちらかといへば面長（おもなが）の方なるに、杯洗（はいせん）の上に俯（うつむ）いてどつちが円いかしらなどとはどういふ心か、荻江の文子（ふみこ）さんが来て、小竹（こたけ）も梅子（うめこ）も内に遊んでゐました

といふに、そんなら呼べと座は遽（にわか）に賑（にぎや）かになりぬ、三谷が梅子に可哀さうに風を引いてゐるといへば、お万引き取りて、この子の寝ざうといつたらございませぬ、それに幾らねんねでも、先刻（さつき）も文子さんが遊びに来ると、鼻をかまうかしらと相談してと笑ふ、三谷色気がない内が妙だといへば、兼吉がそこ処（どこ）は受け合はれませぬ、竹ちやんが岡惚帳（おかぼれちょう）拵（こしら）へれば、いいえあら嫌なんてつたつて話すわ、梅ちやんも人真似をして、ためになるお客の上には大の字、気に入つたお客の上には上の字が幾つも重ねて附けてあるといふ、三谷己（おれ）の名は上の字が十ばかりあるはずとからかへば、沢山

附いてますと笑ふは瘦ぎすの小竹、あら大の字の方だわと正直にいふは靨(えくぼ)の梅子、上の字なんぞ附けてはお万ねえさんに悪いわねえとは、ちびの文子なかなかませたり、下から来た女に堀田原(ほったはら)の使はと問へばまだといふに、追(お)ひ駈(か)けてまた人を遣り、あの竪樋(たてどい)の音に負けぬやうにと、三谷が得意の一中(いっちゅう)始まりて、日の暮るるをも知らざりけり、そもそも堀田原の中屋(なかや)といつぱ、ここらには熟(よ)く知れ渡りたる競呉服(せりごふく)にて、今こそ帝国意匠会社などいふ仰山(ぎょうさん)なものも出来たれ、凝つた好(このみ)といへばこの中屋に極はまれり、二番息子の清二郎へ朝倉より雨を衝(つ)いての迎(むかえ)に、お客はと尋ねれ

ば三谷さんに兼吉さんがお出（いで）とばかり好く分らず、呼びに遣りし車の来ぬ内再度の使忙（せわ）しければ、ともかくも直（じ）きにと荻江まで附けさせ、お幾婆（いくばあ）さんに何であらうと相談すればここでもわからず、そんな噂はなかりしが兼吉さんが引（ひ）っ籠（こ）むので浴衣の誂（あつらえ）でもあるのか知らぬとのみ、家の娘お浅（あさ）の小花さんが待ってお出（いで）なれば帰にはお寄（より）でせうねといふを後（うしろ）に聞きて、朝倉に来（こ）しは点燈頃（ひともしごろ）なり、こちらは一中を二段まで聞かせられ、夕飯もそのまま済ました処、本人の兼吉のみか、待つ人の来ぬは心落着かぬもの、文子は畳の上に置いた団扇（うちわ）を団扇で打ち、下のが上のに着いて上がるを不

思議なことででもあるやうに、厭きずに繰り返してをれば、梅子は枝豆の甘皮を酸漿のやうに拵へ、口の所を指尖に撮み、額に当ててぱちぱちと鳴らしてゐる、そこへ下より清さんがお出ですとの知らせと共に、梯を上り来る清二郎が拵は細上布の帷子、ひんなりとした男振にて綛の藍に引つ立つて見ゆる色の白さ、先づ一杯と盃差したる三谷が、七分の酔を帯びたる顔に笑を含み、御苦労を願つたは私の用といふでもなく、例の商用といふでもなし、ここにゐる兼吉さんから委細の話は直にあるはず、一口に申せば何でもない事、ただもう清さん恋しやほうやれほといふやうな

わけと、何だか分りにくい言草(いいぐさ)に兼吉気の毒がり、一中も最(も)う沢山、可哀さうに私だつてまだ気が狂ふには間があります、なにね清さん詰まらない事なのよ、そりやあさうと清さん今夜は別に用がないなら緩(ゆつく)り遊んでお出(いで)なさいなと、さすがに極(きま)り悪(わ)るげな処へ、兼ての手筈(てはず)に女の来てちよつとこちらへと案内するは、同じ二階の四畳半に網行燈(あみあんどう)微暗(ほのくら)く、蚊(か)の少き土地とて蚊幮(かや)は弔(つ)らねど、布団(ふとん)一つに枕二つ、こりや場所が違ひませうと、清二郎の出ようとするを留(とど)めるは兼吉、胸のみ頻(しき)りに騒がれて、昨夕(ゆうべ)から喫(の)んだ酒の俄(にわか)に頭に上(のぼ)る心地、切角(せつかく)これまで縒(よ)り掛けながら、日頃の願

の縁の糸が結ばれようか切れようか、死ぬるか生きるか、極(き)まるは今の束(つか)の間(ま)と思案するもまた束の間、心は燄語(ほのおことば)は冰(こおり)、ほほほほほ出抜(だしぬけ)だから胆(きも)をお潰(つぶ)しだらうね、話せば直(じき)に分る事ゆゑ、まあちよつと下にゐて下されと、枕頭(まくらもと)の烟草盆を間に置いて二人は坐りぬ、姉さんがさう仰(おつし)やるからは定めてわけがございませうが、お迎の時からこの間(ま)に来るまで、何だか知れぬ事だらけで、夢を見るやうな気がしてなりませぬ、一体これはどうした次第と、いひながら取り出すは古代木綿の烟草入、徐(しずか)に一服吸ひ付くるをぢつと見つめて募るは恋、おや清さんの烟管(キセル)も伊勢新なのねえ、え

えこれはといひ掛けしが、これは小花と揃(そろい)とは言ひ兼ねてか口籠(くちごも)る愛らしさ、ほんに私(わたし)の好(い)い気な事ねえ、清さんに話をするつてぼんやりしてゐてさ、話といふのも本当は大袈裟(おおげさ)な位と、兼吉の言ひ出すを聞けば、この雨の日の退屈まぎれ、三谷さんが兼ちやんも誰か呼んで遊べといひしに、呼ぶ人がないといつたら松つあんではどうだとの事、私がつひ松つあんより清さんが好いといつたが起(おこり)、小花さんといふもののある清さんの名を指したのがいかにもづうづうしい、どうでも清さんと寝かして困らせて遣(や)ると言ひ張り、とうとうここにお前さんを連れ寄せて済みませねど、唯少し

の間横にだけなつてゐて下されば好いといふ、それではは姉さんほんのお茶番なのねえ、三十分もゐたら好いのでせうか、ああ好いどこぢやあなくつてよ、だが皺になるといけないからこの浴衣だけはお着なさいよ、私も着かへるからと扱ばかりになれば、清二郎は羽織を脱ぎながら私やあ急いで来たせゐか、先刻から咽が乾いてなりませぬ、ラムネが貰へるなら姉さん下へさういつて下されといふ故兼吉すぐに廊下に出て降口より誂へるを、かの六畳からお万が見ゐたり、二人は一間に籠りゐて、ラムネの来しをば兼吉が取入れつつ、暫しありて清二郎は湯にとて降りて復た来らず、

雨は夜(よ)の間(ま)に上(あが)りしその翌日(あくるひ)の夕暮、荻江(おぎえ)が家の窓の下に風鈴(ふうりん)と共に黙(だんまり)の小花、文子の口より今朝聞きし座敷の様子訝(いぶか)しく、清さんが朝倉の帰に寄らざりしを思ひ合せて、塞(ふさ)ぎながら湯に往(ゆ)きたるに、聞けば胸のみ騒がするお万があの詞(ことば)の端々(はしばし)、兼吉さんが扱(しごき)ばかりで廊下に出たのを見たとは真(まこと)か、清さんに限つてはと思ふはやはり私の慾目、先刻お仕舞してゐるとき二階の笑声を何事ぞと問ひしに、お浅さんの立ちながらいはれしは、一足先に兼吉さんが来て、内の文子と遊びに来てゐた梅子とを二階へ連(つれ)て行き、踊を浚(さら)つて遣るとの事とか、私に対して昨日から何事もないか

のやうに、その気の軽さがいよいよ憎い、下りて来たならどう言はうか、先（さき）からはまたどう言ふつもりか、所詮内気（うちき）なこの身には過ぎた相手ととつおいつ、思案もまだ極まらぬ時、ばたばたと梯（はしご）降り来し梅子文子は息を切らせて、小花ねえさんに梅子さんの甚五郎（じんごろう）が見せたくつてよ、いいえ文子さんこそ人形のくせに笑つてばかしゐましたといふ後より兼吉も下りて、本当に今日の暑い事ねえと何気なけれど、さうねえといつたきり俯向（うつむ）いて済まぬ顔、文子は急に思ひ出して、さうさう先刻からラムネが冷やしてあつてよ、兼吉ねえさんに上げようやと、何心なく持つて来たるサイフォ

ンの瓶にコップ三つ四つ、先づ兼吉に注いで出すを、小花側よりぢつと見て、ねえさんラムネが好ねと声震はせじとやうやういふに、大好よと無頓着なる返辞、ええ悔やしいと反りかへつて正体なし、その夜座敷を断りて臥しゐたる小花の許へ、つひになきこと目と鼻の間に住む兼吉が文届きぬ、しかもその長々しさは一本の巻紙皆にせしかと思ふばかり、痛む頭を擡げし小花が虫を押へて拾読するその文に曰く、一筆しめし上参らせ候、今は何事をも包まず打ち明けて申上げ候ふ故、憎い兼吉がためとお思なく可哀い清さんのためと御読分下されたく候、申すも御恥かしき事ながら、

お前様といふものある清さんに年上なる身をも恥ぢず思を掛け、出来ぬこと済まぬことと堪（こら）へれば堪へるほど夢現（ゆめうつつ）の境も弁（わきま）へず焦（こが）れ候ふはいかなる因果（いんが）か、これは久しき前よりの事に候へども、御存じの通の私が身持、昨日（きのう）は誰今日（きょう）は誰と浮名（うきな）の立つを何とも思はず、つひこの頃までも親方と私との中は知らぬ人なき位に候ふ事とて、お前様にも清さんにも覚（さと）られ候こともなく打ち過ぎ候ふに、昨日三谷（さんや）さんのお座敷にて、ふとした常談に枝葉（えだは）がさき、清さんを呼んで下され、呼んで遣らうといはれた時の嬉しさいかばかりぞ、これのみは御自分の身に引（ひ）き比（くら）べお察し下されたく候、さて

床の展(の)べあり候間(ま)に清さんと這入(はい)り候時の私の心は、ただただ夢の如くにて自分にもかうかうとはつきり分りをらず候へども搔(か)い撮(つま)んで申し候へば、まことにまことに卑しく汚(けがら)はしく筆に書き候も恥かしき次第、お前様といふものある清さんとこのやうな身持の私が、すなほに彼此(かれこれ)申し候とも願の愜(かな)ふはずなければ、何事も三谷さんの酒の上から出た戯(たわぶれ)のやうに取成(とりな)し、一しよにさへ寝たならば、なんぼ実があるとて、まだ年若な清さん、私はこんなお多福(たふく)でも側にゐられて気持の悪くなるほどの女でもある間敷(まじく)、つひ手が障(さわ)り足が障るといふやうな事にならば、その上で言ひたい事を

も申すべしと存じ候(そうら)ひしには違(ちがい)なく、かやうな悪しき心を持ち候ひし事、今更申すも恥しく候、さて女の性(しょう)は悪しきものと我ながら驚き候は、大人(おとな)しく横になつてゐた清さんの領(えり)へ私が手を遣(や)りし事に候、その時に清さんは身を縮めてぶるぶると震ひなされ候、女の肌知らぬ人といふではなし、可笑(おか)しな事申すやうではあれど色々の男と寝たことある私、つひにない事、はつと思つて手を引き候とたん何とも申さうやうのない心持(ここち)致し、それまで燃え立つやうに覚え候ふ胸の直様(すぐさま)水を浴(あび)せられ候ふやうになり、ふつつりと思ひ切つて清さんにはその手をさへ常談の体(てい)に申しくろめ、

三谷さんの手前湯にといはせて返し候へば、清さんは何ともお思ひなさるまじく飛んだ隙潰しをしたなどと申しをられ候ふ事と存じ候、この始末後にて考へ候ふに、私に罰でも当つたのかお前様の念が通つてゐたのか、拙き心には何とも弁へがたく候、この文差上げ候ふ私の心お前様に熟く分り候はんや覚束なく候へども、先ほど申し候ふ通それはどうでも宜しく、ただお前様が清さんを大事にしてさへお上げなされ候はば、私の願もその外にはござなく候、返す返すも羨ましきは清さんのやうな人をお持なされ候ふお前様の身の上にて、たとひどのやうに憂いつらいと思ふ事ありと

も、その憂いつらいは頼（たのみ）になる清さんのやうな優しい人を持たぬものの憂さつらさに比べては何でもないと、よくよく御勘弁なさるべく候、また私の事はこの上未練がましく申したくはなく候へども、今までも不身持な女子（おなご）のこの末はどうなり申すべきか、我身で我身が分り申さず、どうして私はかうなつたやら、どうして私はどうならうか知れぬやら、それはお前様に申しても甲斐（かい）なき事と致し候うて、ここに一つ申し置き候ふは、もし少しにてもこの文の心御解（おわかり）なされ候はば、昨夕罪のない清さんを罪に堕（おと）さなかつたのは兼吉だ、よしや兼吉が心から罪に堕すまいと思つてではないに

しても、罪に堕すことの出来ぬやうな何とも知れぬ心に兼吉はなることがあつたといふ事ばかりに候、この後清さんには指もさすまいと思ふ私に候へば、つひ何事もなかつたやうに御附合のほど祈り入り参らせ候かしく、なほなほこの手紙御取棄(おんとりすて)なされ候ふとも、清さんになり誰になりお見せなされ候ふとも宜しく候、小花様へ兼吉よりとはさてさて珍しき一通、何処(どこ)が嬉しくてか小花身に添へて離さず、中屋の家督に松太郎(まつたろう)が直(なお)りし時、得意先多き清二郎は本所辺に別宅(べったく)を設けての通(かよ)ひ勤(づとめ)、何遍(なんべん)言うてもあの女でない女房は生涯持ちませぬとの熱心に、物固い親類さへ折り合ひて、小

花を嫁に取引先なる、木綿問屋の三谷が 媒(なかだち) したとか、兼吉はまたけふが日まで、河岸(かし)を変への浮気勤(うわきづとめ)、寝て見ぬ男は誰様の外なしと、書かば大不敬にも坐せられるべきことといひて、馴染(なじみ)ならぬ客には胆潰(きもつぶ)させることあれど、芸者といふはかうしたものと贔屓(ひいき)する人に望まれて、今も歌ふは 当初(そのむかし) 露友(ろゆう)が未亡人(ごけ)なる荻江(おぎえ)のお幾が、かの朝倉での行違(ゆきちがい)を、老(おい)のすさびに聯(つら)ねた一節(ふし)、三下(さんさが)り、雨の日を二度の迎に唯だ往き返り那加屋好(なかやごのみ)の濡浴衣(ぬれゆかた)慥(たし)か模様は 染違(そめちがえ)。

底本：「舞姫・うたかたの記　他三篇」岩波文庫、岩波書店
　　１９８１（昭和56）年1月16日第1刷発行
　　１９９１（平成３）年5月15日第19刷発行
底本の親本：「鷗外全集　第三巻」岩波書店
　　１９７２（昭和47）年1月刊
初出：「新小説」
　　１８９７（明治30）年8月5日
入力：土屋隆
校正：noriko saito
２００６年3月25日作成

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。